

「一生結婚するつもりはない」～超長期的意思決定の合理性

田中辰雄^a

要約

非婚・晩婚問題を語る時、独身者では「いずれは結婚するつもり」と答える人が9割を占めているため、結婚意欲はあっても障害があってできないことが問題とされてきた。しかし、近年「一生結婚するつもりはない」と答える人が急増しており、20年前の5%程度だったのが15%を超えるまでになっている。周知のように幸福の経済学では結婚は幸福度を高めることが知られており、それにもかかわらず結婚を望まない人が増えている。その理由を探索的に考察する。方法はすでに人生半ばを過ぎた50～69歳の人への人生振り返り調査と、20～35歳の独身者への結婚意欲の調査である。その結果、まず、かつて結婚するつもりのない人はいたが、彼らが未婚のまま幸福になったという事実はない。人間の多様性を考えると一概には言えないものの、結婚意欲が低下して未婚者が増加した場合、社会全体として幸福度が下がる可能性が高い。個人がそのように長期的には合理的とは思えない意思決定を行う理由としては、人生の先行者である50代以上の人の幸福度の情報が正しく若年層に伝わっていない可能性がある。

JEL 分類番号 : J12, I31, Z13

キーワード : 結婚, 幸福度, 合理性, 少子化問題, ネットメディア

^a 横浜商科大学 tatsuo@shodai.ac.jp, 国際大学 GLOCOM tatsuo@glocom.ac.jp

1 問題意識

未婚化・晩婚化に対しては、従来、結婚したくてもできないことが問題視され、その原因が追究されてきた。たとえば佐藤，他(2016)は個人のパネルデータを使って結婚の意志決定を分析した包括的な研究であるが、冒頭のところで結婚を望まない人が少数（5%程度）いると認めただけでこれを分析の対象外とし、結婚を望む人を主たる分析対象としている。

しかし、近年、そもそも結婚を望まない人が増えてきているという新しい現実がある。「出生動向基本調査」の最新の2021年版では、20歳～34歳の独身のなかで「いずれは結婚するつもり」が急減し（図1(a)）、「一生結婚するつもりはない」が伸長した（図1(b)）。長らく9割の人が結婚するつもりがあるのだから、この層を結婚に導けばよいと政策担当者が考えていたとすれば、その前提が崩れたことになる。図1(b)を見ると、一生結婚するつもりはないと答えた人が男性では17%、女性では14%を超えており、この勢いが続けば2割程度には達しそうな勢いである。

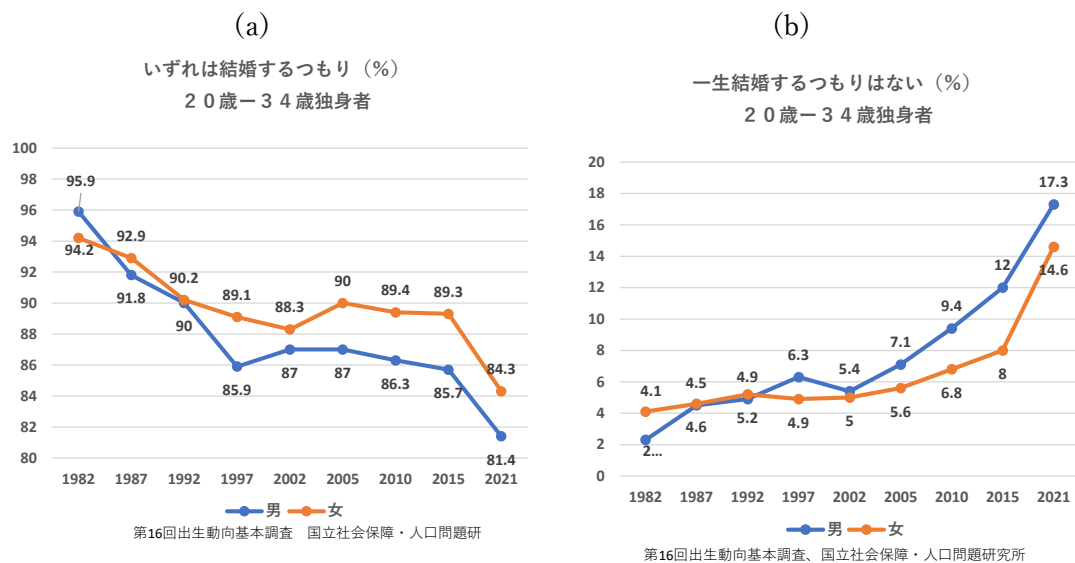


図1 結婚の意志の長期動向

これをどう考えたらよいのだろうか。結婚不要論（山田，2019）から反出生主義までいろいろ評価はありうるが、評価以前に、経済学としては一生結婚しないという意思決定が当人にとって“合理的”なものかを問うことができる。周知のように幸福の経済学によれば結婚は幸福度を上げる。それにもかかわらず一生結婚するつもりはないと思うのは合理的なのか。結婚するかどうかは一生にかかわる長期的な意思決定で、しかも後戻りできない。このような意思決定はそもそも合理的（ここでの合理性とは、当人にとって満足できる、後悔がないというほどの意味である）にすることは困難が伴う。本稿ではこのような問いへの探索

的調査を行うことを意図している。調査の焦点は「一生結婚するつもりはない」という意思決定がもたらす結果，ならびにそのような意思決定を行う理由である。

2. 「一生結婚するつもりはない」の評価：人生振り返り調査

いま一生結婚するつもりはないという意思決定をした人が，これからどのような人生を送るのかは将来のことなので無論わからない。しかし，手掛かりとして，過去にそのような意思を持っていた人がどのような人生をおくったかは調べることはできる。いわば人生振り返り調査である。過去についての調査であるため，将来にはあてはまらない可能性はあるが，人間の本質として変わらない部分もあるだろう。

調査は2023年9月11日に実施した。調査会社はFreeasyでサンプルは50歳～69歳の9803人である。まず，20代のころに結婚についてどう考えていたかを，出生動向調査と同じ2択で答えたもらった。表1の上段がいずれ結婚するつもりと考えていた人で，下段が一生結婚するつもりはないと考えていた人である。(1)列はその人数で，一生結婚するつもりはないと答えた人は2100人いた。ただし，(2)(3)列を見ればわかるように，そのうち半数は最終的には結婚している。

表1 20代のときの考え別に見たときの未婚・結婚歴と幸福度

	(1) (2) (3)			(4) (5)		(6) (7)	
	N			幸福度		幸福度	
20代の時の考え	全員	未婚	結婚経験有	未婚	結婚経験有	全員	SD
「いずれ結婚するつもりである」	(7703)	664	7,039	5.6	7.2	(7.1)	(2.14)
「一生結婚するつもりはない」	(2100)	1,006	1,094	5.4	6.1	(5.7)	(2.58)
計	(9803)	1,670	8,133				

現在の状況を評価する方法としては，いわゆる幸福度調査の10段階の幸福度を使う。上の(2)(3)列の4つのセルごとの現在の幸福度を(4)(5)列に記した。いずれ結婚するつもりと考えていた人の場合，幸福度は未婚の場合が5.6で結婚した場合が7.2なので，結婚した場合の方が高い。いずれ結婚するつもりと考え，その望み通りの結果になったのであるから高いのは自然な結果である。一方，一生結婚するつもりはないと考えていた人の場合，未婚の場合の幸福度は5.4と低い。一生結婚するつもりはないと考えていた人は，望み通りになったとしても幸福度は低い（本人の“つもり”に反して結婚すると幸福度は6.1に上昇する。）

最終的に結婚することになるかどうかは，本人にもわからないのであるから，全体の平均値で評価するのが妥当である。それが(6)で，いずれ結婚するつもりと考えていた人の現在の幸福度は7.1で，一生結婚するつもりはないと考えていた人の現在の幸福度は5.7であ

る。一生結婚するつもりはないと考えていた人の幸福度の方が低く、また、標準偏差で見ればらつきも大きい ($2.14 < 2.58$)。すなわち一生結婚しないという意思決定は、50代以降の幸福度をハイリスク・ローリターンにする。

他の要因も制御するために、被説明変数を幸福度とし、年収、性別、年齢、子供の有無、持ち家（資産あるいは親の所得の代理変数）をいれて回帰したが、結果は同じであった。一生結婚するつもりはないという意思決定は幸福度を下げる。なお、幸福度の低下は男性の方が大きく、女性の1.8倍程度の強度で幸福度を下げている。

人間は多様であり、結婚しようと思うかどうかはその人のさまざまな状況に依存する。その人だけの特別な事情があつて一生結婚しないであろうと思うことは人間としてあつて当然である。しかし、最近20年ほどの結婚意欲の減退はそのような特別な事情のためではないだろう。その人だけの特別な事情がここ20年で多くの人で一斉に変化したとは考えにくいからである。何らかの環境要因を背景に意思決定されたと考えるのが自然である。

そうだとするとこの意思決定が合理的であつたかどうかには疑問符がつく。振り返りデータに基づく限り、平均的には幸福度の低い道へ（しかもリスクの大きな道へ）進んでいることになるからである。さらに言えば、結婚しないと決めた場合の幸福度が大きく下がるのは男性なので、男性こそ結婚意欲を維持したほうがよい。それにも関わらず、図1(b)で結婚意欲が下がっているのは女性ではなくむしろ男性である。これも理屈には合わない。全体として、特に男性は不幸に向けて行進を始めたように見える。これはなぜだろうか。

3. なぜ「一生結婚するつもりはない」と思うのか

一見して合理的に見えない行動があるとき、見方を変えれば合理的に説明できることを示すのは経済学の常套手段である。ここでもそれを考える。20～35歳の人になぜ一生結婚するつもりはないかを問うアンケート調査を行い、説明変数を探索することを試みる。調査会社は同じく Freeasy で、調査時点は9月19日、20歳～25歳の独身で子供のいない人8497人である。

被説明変数として、出生動向調査と同じ設問を出し、いずれ結婚するつもりか、一生結婚するつもりはないか、と2択で聞いた。一生結婚する気はないと答えた人が2444人おり、これを1とするロジット回帰を行う。表2がその推定結果である。説明変数はたくさんあるため、以下、有意となった注目する変数についてのみ説明する。

最初の1)は、回答者に、50代の人では結婚による幸福度の差がどれくらいあるかを聞いた結果である。すでに述べたように、結婚した人は結婚していない人より幸福度が高い。このことが若い世代に正しく理解されていないために、一生結婚しないと考える人が増えている可能性がある。この可能性を見るため、人生の先行世代である50代で結婚している人

と結婚していない人の幸福度がどれくらいだと思いかを尋ねて答えてもらい、その差を変数にとった。負で有意なので、結婚するかしないかによる差が大きいと考える人ほど一生結婚しないと答える人が減っている、すなわち結婚意欲が高まっている。差が大きいという事は現実に存在する結婚による幸福度の上昇を正しく知っていることなので、正しい情報が結婚意欲を維持することになる

表2 「一生結婚するつもりはない」という考えの決定要因 (20~35歳)

ロジット回帰結果 VARIABLES	(1)	(2)
	結婚しないつ もり	結婚しない つもり
	男性	女性
(i) 1)50代の結婚の幸福度予想の差 (指数)	-0.269***	-0.243***
2)50代の幸福度を知らないダミー	0.770***	0.548***
(ii) 3)職場の50代の未婚の人の数	-0.106***	-0.0420**
4)親戚の50代の未婚の人の数	-0.0179	0.0228
(iii) 5)フェイスブック利用頻度 (対数)	0.0116	-0.0194
6)インスタグラム利用頻度 (対数)	0.00250	-0.0475
7)TikTok利用頻度 (対数)	-0.0271	-0.211***
8)ツイッター利用頻度 (対数)	0.0153	0.0854***
9)LINE利用頻度 (対数)	-0.387***	-0.341***
(iv) 10)一人でアウトドア活動 (対数)	0.311**	0.664***
11)友人と一緒にアウトドア活動 (対数)	-0.0399	-0.454**
12)外で友人と会う (食事、買い物) (対数)	-0.394**	-0.217*
13)家で趣味に没頭する (対数)	0.301***	0.307***
14)ネットで過ごす (SNSなど) (対数)	-0.0684	0.0401
15)オンラインゲーム、メタバース等 (対数)	0.259**	-0.00236
16)家で家族と過ごす (対数)	-0.0973	-0.0101
(v) 17)生きがいとなる趣味、ライフワークあり	-0.164**	0.0580
(vi) 18)時間選好指数 (現在志向、標準化済)	0.00296	0.0397
19)年収 (百万円)	-0.0279**	-0.00753
20)年齢(才)	0.0342**	0.00233
21)私の生活はこれから良くなっていく	-0.253***	-0.331***
22)私の生活はこれから悪くなっていく	-0.0404	0.116**
Constant	0.546	0.447
Observations	1,612	3,497
Log Likelihood	-808.59	-1560.70

Standard errors in parentheses

*** p<0.01, ** p<0.05, * p<0.1

次の2)は、この同じ問いで、50代の人々の幸福度がわからないと答えた人のダミー変数である。正で有意なので、先行する世代の幸福度がわからない人は、一生結婚するつもりはないと答える傾向がある。これも先行世代の情報が伝わっていないために結婚するつもりが

ないと思うようになったと解釈できる。3)で職場での50代の未婚の人の数が増えるほど結婚意欲が増えているのも同様の解釈が可能である。職場で50代の未婚の人が増えると、50代で未婚の場合の状態が直接にわかるようになり、それゆえ結婚しようと思うようになる。結婚意欲の減退の原因として先行世代からの情報の遮断が一つの要因として浮かび上がる。

ついで5)~9)はソーシャルメディアの利用頻度である。ソーシャルメディアは引きこもりをつくり結婚への意欲をそいでいるように思えるが、この結果を見るとそうでもない。LINE, インスタ, TikTokが有意にマイナスであり、特に女性ではこれらメディアの利用者の結婚への意欲が高いからである。興味深いのは例外があることである。女性の場合、ツイッターで結婚するつもりのない人が増えている。ツイッターは引きこもりを作り出すようなメディアではない。ツイッターユーザに結婚するつもりのない人が多いのは、ツイッターを流れる結婚や子育てに関する呪詛のような愚痴のためと思われる。

以上をまとめてみて、一生結婚するつもりがないという意思決定の合理性を考えてみる。主観的にはどんな人も合理的である。しかし、それでも自分の幸福度を長期的には下げるような意思決定をしてしまう理由は、この回帰表からは二つ見いだせる。ひとつは先行する世代(50代以降)の状況が正しく伝わっていない可能性である。先行する世代での幸福度を正しく認識していない場合、結婚する気はないと考える人が増える。もうひとつはややマイナーであるが、ツイッターの悪影響である。ツイッターの書き込みを見ていると結婚生活の愚痴ばかりであり、やる気をなくす効果があるのかもしれない。

結婚は超長期の意思決定である。超長期のことは想像がつかずやり直しもきかないため、合理的な判断は難しい。その場合有力な意思決定方法は先行する人を見ることである。ちょうど学校を選択するとき、昔その学校を出た人が社会のどこで活躍しているかを見るようにである。おそらくこれまでは結婚の場合でも先行する世代から情報が伝わっていたと考えられる。ある時は親から、ある時は職場の先輩等から。しかし、これらの回路は失われ、情報が伝わらなくなった。当人にとって短期的には合理的であるが、長期的には合理的ではない決定が行われているとすれば、その原因はこの情報の遮断にあるのではないだろうか。

山田昌弘, 2019, 『結婚不要社会』朝日新聞出版
佐藤博樹, 三輪哲, 高見具広, 高村静, 石田絢子, 2016, 「結婚の意思決定に関する分析～「結婚の意思決定に関する意識調査」の個票を用いて～」 ESRI Discussion Paper Series No.332